

海外十九国から三十四人、日本から三百六十人の成人吃音者、研究者、臨床家が参加した世界で初めての吃音問題研究国際大会(八月八日—十一日、国立京都国際会館)が終つた。準備の段階から成果、今後の課題について振りかえつてみたいと思ふ。

【準備】法人格も経済的基
今回の国際大会は、吃症状 集めたカンパ総額は千百万円 にもとられるのでなく、ども にも達した。大勢の会員が人吃 生きていることを提唱する言友会 会ではの事業であり、言友 会のインシアチブをとり、準 備を進めた意義はここにあつ たの。



伊藤 伸二

どもりつつ自己表現を

吃音問題研究国際大会を終えて

さまざまな重要な問題によつてか
まゝに行動できない。」「
と逃げた。吃音者は多い。
へんりつとつと言葉はすらすら
と出てきた。どもりつつも病的な
嫌悪し、どもりつつも病的な
ほゞ否定的な感情をもつてい
る人も多い。どもりを家族に
も友人にも隠している吃音者
もまた多い。そのように日常
の生活で逃げてはかからない吃
音者の集団であれば、国際大
会の開催なら不可能であつた
まゝ。

宣言は頭では分かるが実際の
には行動できないという人
が、頭での理解から経験を通
アメリカならば、吃音に対す
る態度の改善についても強調
していった。

成果は多くであつたが、職
場の同僚全員にカンパを訴え
た人がいた。多くの吃音者が
プローチの危険性を指摘し、
生きる方向へのアプローチを
主張した。治療からくる副作
用、治療から生活治療へと移
行した経緯、吃音の評価とそ
れに基づく治療プログラムの

をめざす取り組みであり、吃
症状の改善、消失もその大き
なわくの中に位置づけられる
べきである」

参加した世界各国の吃音
者、研究者、臨床家が、この
場で合意に達した意味は大き
い。これは、どもりつつは吃症
状にのみ目を向けがちであつ
た吃音者、研究者、臨床家へ
の警告であり、さらには「こ
もりは簡単に治るもの」とい
う一般社会通念への警告であ
つた。

また、三年後、西ドイツで
の第二回大会開催が決定した
ことの意味も大きい。吃音に
かかわるすべての人々が集う
第一回大会の基本理念が第二
回大会へと継承されることに
なる。

【課題】吃音をどう評価
し、その結果をどのようなプロ
グラムを組むか、その成果をま

たのうちに評価するか。開
発された治療法の有効性をと
つて、三年後に開かれる西ドイ
ツ大会では、一歩前進した共
同の取り組みが提唱されなけ
ればならない。第一回の開催
はならない課題は多い。単な
る世界各国の情報交換だけで
なく、調査、研究、臨床の真
の共同の歩みを実現するよ
う、まず日本がそのモデルを
提供し、国際協会会長、第一回吃
音問題研究国際大会会長—
九四四年、奈良誕生。明
治大学文学部・政経学部卒
業。一九六六年、全国言友会
創立。一九七六年まで大阪教
育大学講師(聴覚・言語障害
児教育)。著書に「改訂吃音
研究ハンドブック」「人間と
コミュニケーション」「吃音
者宣言」(いずれも共編著)